

「コミュニケーションツールを用いて製作したインプラント補綴について」

宮崎 恵子

近年、インプラント治療におけるチームアプローチの中で、歯科医師はインプラント体を埋入し、周囲組織の環境を整備する。歯科技工士は理想的な上部構造を提示、製作し、歯科衛生士は歯科医師のサポートをしながらインプラント補綴と周囲組織を管理、維持している。

チェアサイドの情報には軟組織の性状や反応、さらには患者の要望、清掃能力や協力度などデジタル化が困難なものも多く、それらをどのようにしてラボサイドに伝達し、インプラント補綴を長期的に安定させられるのかがカギとなる。

そこで今回、それらの情報を効率的かつ正確に移行させ、最新のデジタルソリューションを使用したインプラント上部構造製作法について共有していきたい。

『審美インプラント治療における技工サイドからのアプローチ』

藤田 一志

インプラント治療は、術式の確立や多様なエビデンスに基づく治療が進むことで、予知性の高い欠損補綴治療オプションの一つとなった。

また、デジタル技術の目覚ましい進展により、前歯部などの審美領域においても、精度の高い診断と治療計画を行うことで、その後の補綴治療を行う上で、適切なポジションにインプラントを埋入することが可能となった。

インプラント補綴物を製作する際、歯科技工士はチェアサイドと積極的にコミュニケーションをとり、チェアサイドから与えられた患者資料を有効的に活用しながら補綴物製作を進めることが、後戻りのない精度の高い補綴治療を行う上で非常に重要であり、結果として患者の治療満足度向上にもつながる。

今回は、審美エリアでのインプラント治療を進める際、歯科技工士の立場からみてどのような治療ステップが望ましいか、また各工程においてのポイントなどを紹介したい。